出　張　報　告

報告日　令和７年１０月２７日

会 派 名	社会クラブ・柏崎のみらい連合
報告者氏名	池野里美
種　　別	■調査研究（■行政視察）　□研修会　□要請・陳情　□各種会議
用　　務	新潟県女性議員の会　　妙高市・上越市への取組視察
日　　時	R７/１０/２３（木）　１０：００　　～　　R７/10/２３（木）１３：００
場　　所 （会 場）	①　新井南小学校（妙高市大字除戸 1887）、 ②　NPO 法人あいあう、③妙高はねうま複業協同組合（妙高市大字長森 1854・旧斐太南保育園内）
調査項目等	①　小規模特任校におけるイエナプランについて ②　こども食堂などを運営する NPO 法人の収益事業について ③　民間の力をフルに活用した実践的な FPI 事業と県内外への活用促進
概　　要	【新潟県女性議員の会～妙高市・上越市の取組視察～】 10 月 23 日㈭ 10：00～新井南小学校視察 ①　女性議員の会会長より挨拶 ②　妙高市教育長・塚田様より挨拶 ③　妙高型イエナプラン教育の説明（子ども教育課指導主事より） 1・現在の教育の課題と「令和の日本型学校教育」 ２・新たな教育システム構築に向けて ３・イエナプラン教育の特徴 ４・妙高型イエナプラン教育のコンセプト ５・妙高型イエナプラン教育の地域との連携に係る基本的な捉え 6・これまでの取組 ７・令和 7 年度の取組 ④　授業参観（自由進度学習の時間を参観） ⑤　学校説明（妙高南小学校丸山校長先生より） ⑥　質疑・応答 12：00～NPO 法人あいあうにて昼食・代表より説明 12：45～妙高はねうま複業協同組合にて説明

所　感　等	＜新井南小学校・小規模特任校での妙高型イエナプラン教育の視察＞ 少子化の影響で、学校の存続はどこの自治体においても課題となっている中で、選ばれる学校を目指し小規模特任校となることを決めたが、特任校に指定するためには、特色ある教育を行う必要がある。そこで、妙高市として、子ども観、授業観、学校観等の見直し・変換を図り、「児童生徒を主語にした学校づくり」「児童生徒をまんなかに据えた学校づくり」、「子どもたちが自ら考えて、自らの責任で選び、決して他人のせいにはしない」等を具現化した授業とはどういうものか、新たな教育システムの構築を模索。2019 年に妙高市の教育長が長野県、大日向小学校への訪問をきっかけに、主にオランダで実践されている「イエナプラン教育」へ挑戦することとなった。 実際に、自由進度学習の時間を参観させて頂き、子どもたちが自ら取り組むことを決め、好きな場所で思い思いに意欲的に取り組んでいる姿を見ることが出来た。木製の椅子や机、円形に並べられたベンチ、教室の隅に天井が低く囲われた秘密基地のような空間、壁で仕切られていない教室の作りとなっており、それぞれ、自分の好きな場所を選び、友達と一緒でも一人でじっくりでも、取組み方も自由。算数をする子、国語をする子、タブレットを使う子、ドリルを使う子と様々。一斉の受け身でない授業スタイルはとても魅力的であった。小規模校ならではの良さを生かした授業スタイルだと感じた。1～3 年と、4～6 年までの異年齢の学級編成となっており、子ども同士で自然と教え合う姿もあった。子どもたちの育ちや姿を嬉しそうに話す校長先生の笑顔がとても印象的で、先生方が子どもたちを見守る目も温かく、少子化の進む今、妙高型イエナプラン教育の姿は小規模の学校が存続していくための素晴らしいモデルであり、柏崎市の学校でも非常に参考になると感じた有意義な視察であった。 ＜NPO 法人あいあう＞ 閉園した保育園を有効活用し、一人親家庭を中心に月に一度の登録世帯へのフードシェアリングを行ったり、学用品や古着のリユース活動、不定期の子ども食堂などを運営したり、子育て世代が安心して集える温かな場となっていた。NPO 法人としての収益を上げるために、元給食室を活用し、ランチ提供を開始。地元で閉店したカレー屋さんのレシピを引き継ぎ魚のだしを使ったカレーや季節のメニューなどを提供している。この日も多くの女性や赤ちゃん連れの子育て中の母親などでにぎわっていた。こちらでは、元教員や元保育士、退職後に子どもたちの役に立ちたいという先輩方や学生さんなど多くのボランティアで運営されていて、とても素敵な取組だった。 ＜妙高はねうま複業協同組合＞ 上記法人と同じ閉園した保育園の一角を活用し事務所を構えている。2023 年から始めたこの活動で、現在関東方面から平均年齢 28 歳の若者が 11 名、この仕組みを活用して妙高市で働いている。給与では関東圏にかなわないが、自然が好きで、自分らしさを活かした働き方を求める若者にとって、首都圏との差別化を図り、収入だけでないライフスタイルの充実を図れるこの仕組みは魅力的に感じるのだと思う。東京にある様々な仕事体験ができる子ども向け施設キッザニアの、大人版リアルキッザニアと考えてもらうとイメージしやすいという表現が印象的だった。柏崎市でも、様々な業種と連携したマルチワークのできる仕組みを取り入れることで、首都圏から若者の移住促進につなげて行けるといいのではと感じた。